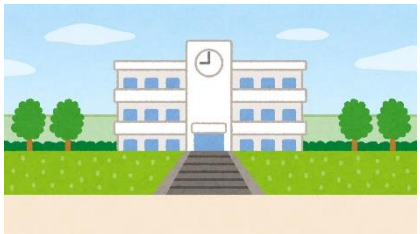
川井真由先生は神奈川県から推薦を受けて、令和５年４月からJICA（国際協力機構）の海外青年協力隊の一員として、ザンビア共和国に派遣されています。

まゆ先生のザンビアうるるんにっき６

“Mwachoma bwanji?”（ムワチョマ　ブワンジ、　一日どうでしたか？（「こんにちは」の意味で午後に使われるあいさつ。）　最近は園児と関わることが多く、現地語の嵐に日本語で返してコミュニケーションを取っている川井です。（現地語も少しずつ習得中。）

今回は、私の職場トゥルーバイン　コミュニティ・スクールについて説明します。

私の職場について　～その２・コミュニティ・スクール～



はじめに、ザンビアの学校制度を紹介します。ザンビアにも日本と同じように、小学校、中学校、高校、大学などがあります。（中学校と高校は、あわせてセカンダリースクールと言います。）小学校は７年間で１年生～７年生、中学校は２年間、高校が３年間で、８年生～12年生と呼ばれます。

そして、ザンビアでは、学校を誰が運営しているかによって、「公立」「私立」「コミュニティ」と大きく３つに分かれます。「公立」「私立」は日本にもあるので想像しやすいと思います。

では「コミュニティ・スクール」とは…？そこにはザンビアが抱える「ある問題」があります。

先日、公立の小学校で働いている先生に話を聞きました。その学校は、在籍数は１クラス120人、実際に来ているのは80人ほどだそうです。

しかし、それでも教室が足りないので、朝・昼・夕方と３展開して、１つの教室でそれぞれ100人近くの生徒が授業を受けているとのことでした。別の公立の学校では、朝の７時から授業が始まり、１・２年生は１日２時間の４部制で運営しているそうです。

ザンビアでは、このように、「子どもが多くて学校が足りない」という問題があります。

出生率（女性一人あたりの子どもの数）を比較してみると、2021年のデータで、日本は1.3、それに対してザンビアは4.3です（世界銀行のデータより引用）。簡単に言うと、毎年日本の３倍近い子どもが生まれています。ザンビアの子どもや人口は、年々増えています。

先ほど説明したように、多くの子ども達が公立の学校に通っています。しかし、それでも学校が足りません。

そこで、ザンビアには地域の人がつくった学校「コミュニティ・スクール」があります。学校と言っても、私のいるトゥルーバイン　コミュニティ・スクールには、教室が３つしかないので、「園児～２年生」「３年生～５年生」「６年生～７年生」と複数の学年が同じ教室で勉強しています。時間は朝８時～午後３時半までで、給食にはシマを食べます。（シマは、うるるんにっき３で紹介しましたね。）

学校というより、小さな塾のようなものを想像してもらうと良いかもしれませんね。

公立の学校では税金が使われていますが、コミュニティ・スクールは、教室も、勉強の道具も、給食も全部自分たちで用意しないといけません。先生たちはみんなボランティアで教えています。机やイスは足りないので、廃材を使って校長が自ら作っています。給食は、支援団体のフードバンクが２週間に一度持ってきてくれる食材を使いますが、それだけでは足りないので、給食費を集めて材料やコンロの木炭を買います。

常に「お金がない！物もない！でも、子どもは常にいっぱいいる！！」という状態です。このギリギリの状態で、学校がなんとか回っています。

「コミュニティ・スクール」イメージできましたか？ないものを言えばキリがありませんが、そんな環境でも学校に来て頑張る子ども達、先生がいます。

「高校で変わりたい」そんな風に頑張る皆さん、応援する先生と、どこか似ているかもしれません。ザンビアに来て、日本の学校の良さ、向陽館の良さ、コミュニティ・スクールの良さ、日々気付かされています。

（2023　11/10　川井　真由）